東野圭吾『ガリレオ』における「技術者倫理」

Engineering Ethics in Higashino Keigo's *Galileo*

笠井　哲
福島工業高等専門学校一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education
(2013 年 9 月 13 日受理)

Yukawa Manabu of the genius physicist receives the request of Kusanagi Shunpei of the detective in the friends of university student days, and solves the cases in Higashino Keigo's *Galileo*. They are the mysterious cases to get with the supernatural phenomenon that Yukawa wrestles. Author Higashino is the former engineer . In the frame called the whodunit, Higashino lets Yukawa of the chief character speak the following things. About the relations with technology and the human being more about relations with technology and the society. The purpose of this paper is to consider the engineering ethics in Higashino Keigo's *Galileo*.
Key words: Higashino Keigo, *Galileo*, Yukawa Manabu, engineering ethics

「どうした、諦めるのか？」湯川が電話で訊いてきた。「一年近くも準備してきたんだろ。警察に捕まることも覚悟の上だったんだろ。だったら、何を躊躇う必要がある。私のことなら気にするな。これもまた自業自得だ。教え子に正しく科学を教えてやれなかったことに対する罰だ」[1)]
（「猛射つ　うつ」より）

1. はじめに

東野圭吾（1958～）の『ガリレオ』は、天才物理学者の湯川学が、大学時代の友人で刑事の草薙俊平の依頼を受け、超常現象ともとれる不可解な事件を解決してゆく推理小説の連作シリーズである。これは、現在までに８冊が刊行されており、『ガリレオシリーズ』とも『物理学者湯川シリーズ』とも呼ばれている。

東野は、大阪府立大学工学部電気工学科を卒業し、日本電装株式会社（現デンソー）に技術者として入社した。勤務の傍ら推理小説を書くが、江戸川乱歩賞受賞後に専業作家となる。

つまり、東野は元エンジニアであり、あくまで推理小説の枠組みの中においてであるが、科学技術と人間、さらに科学技術と社会との関係について、主人公湯川を通して主張している。本稿の目的は、東野圭吾の『ガリレオ』における「技術者倫理」について考察することである。

2. 苦悩する物理学者

本稿のテキストは、『ガリレオの苦悩』と最新作の『禁断の魔術　ガリレオ８』の２冊とする。この２冊には、特に人間と科学または科学技術について、丹念に描かれているからである。

まず、『ガリレオの苦悩』は、2008年に『聖女の救済』と同時刊行された推理短編小説集である。以前の湯川は、犯罪に対しても第三者的であり、科学の力で犯行のトリックを解くことに専念していた。しかし、この短編集から犯罪や犯罪者にまでも、深く関わるようになる。そのため、ガリレオの「苦悩」という題のもとに纏められているのである。この作品集に、テレビドラマ『ガリレオ』の企画から生まれたキャラクターである、内海薫が登場する。本作品集には、湯川が深く関与する事件が多く収録されている。

第一章の「落下る　おちる」では、マンションから30歳の銀行事務員・江島千夏が転落死する事件が発生する。被害者に鍋で殴られた痕跡があったことから、他殺の可能性も浮上したため、捜査一課が担当することになった。

その後、被害者の先輩である岡崎光也が名乗り出て、被害者宅を訪れたことや、マンションを出て行った後で被害者が転落する場面を目撃し、その場でピザ屋の店員にぶつかったとアリバイを供述する。

しかし、女性刑事の薫は、女性の下着が入った宅配便が玄関にあったことなどを理由に、岡崎が被害者と恋人関係にあると睨み、岡崎に疑念を向ける。しかし、その岡崎が離れた場所にいて、どうやって被害者を転落させたのかはつかめないでいた。

そこで、薫は草薙に頼み込んで、以前捜査協力をしていた湯川に協力を仰ぐことに。しかし、草薙から紹介状を受けた湯川には協力する意思がなく、頑なに協力を拒むのであった。落胆した薫であったが、トリックに関する自分の仮説を述べたことで、湯川に「価値のない実験なんかはない」[2] という言葉を送られ、自分の説の検証に挑んでいく。無骨な草薙と異なり、目端の利いた内海薫が湯川の心をとらえる。

第二章「操縦す　あやつる」では、湯川と恩師との対決が描かれている。かつて「メタルの魔術師」[3] と呼ばれた元帝都大学助教授であった友永幸正は、久々にかつての教え子たちと自宅で酒を飲んでいた。幸正が席をはずし、教え子たちが話をしていると、離れ家から炎が上がり始める。

離れ家に住んでいたのは、幸正の息子邦宏で、消防の必死の消火もむなしく、すでに息を引きとっていた。警察は、火事による焼死と見たが、遺体の状態から刺殺であることが判明した。しかし、離れ家は密室である。さらに凶器も見つからず、特定もできていない。

担当の草薙たちが現場に到着すると、何とそこには湯川がいた。湯川も、この久々の再会に参加する予定であり、その場には間に合わなかったものの、事件の状況は把握していた。

偶然事件に巻き込まれた湯川であるが、事件の真相を追うにつれ、意外な真相を知ることになる。前作の結末で、捜査協力への復帰を否定した湯川であったが、恩師を救うため積極的に事件に関わる。なお、この事件については、項を改めさらに検討したい。

第三章「密室る　とじる」では、大学時代の友人でペンションを経営する藤村から、ある事件に関わる謎の解明を依頼された湯川は、藤村のペンションに招かれる。謎は、藤村のペンションの原田という宿泊客が、部屋を抜け出し、ガードレール下の崖から転落死したのであるが、その行動に疑問を感じるというのである。

事件の前、夕食頃に藤村が被害者を読んだところ応答がなく、ドアチェーンが掛かり、窓からも鍵がかかっていた。二度目に呼んだ時には、被害者がいる気配がしたが、しばらくすると他の客から窓が開いているのを聞いたときには、被害者は失踪し転落死していた。

藤村は、最初に呼びかけた時には、鍵がかかった部屋にいなかったはずの被害者が、二度目に呼びかけた時に、部屋にいたという「密室」の謎が気に掛かっていた。原田は転落死する前に、施錠された密室を出入りしていたというのである。

藤村の頼みを聞いた湯川は、謎を解明するため、周囲への聞き込みを開始する。しかし、藤村は必要以上に事件前の周囲の状況を詳しく知ろうとする、湯川の詮索を嫌い、最終的に調査を断ってしまう。しかし、その次の日、湯川は事件の裏にある一つの結論を藤村に告げる。

ここでは、友人のために、奔走する湯川の姿が描かれている。彼の学生時代は、科学にしか興味のない堅物であったと前作で指摘されていたが、ここでは友に対して深い思いやりを示す。湯川が、人間味溢れる人物として描かれている。

第四章「指標す　しめす」では、75歳の老婦人、野平加世子が絞殺される。事件があった時には、被害者が飼っている犬がどこかへいなくなっていた。仏壇に巧妙に隠した10キロもの金塊が、盗まれていることから、事件を担当する草薙と内海は、被害者の内情を知る者の犯行と判断する。

犯行のあった日に被害者宅を訪ねた、保険外交員の間瀬貴美子に嫌疑がかかる。貴美子は、亡くなる直前の野平老人を訪問しており、金塊のありかを知っていた。証拠が見つからず、捜査は難航するのであった。

ある時、同僚の岸谷と真瀬家の張り込みをしていた内海薫は、貴美子の娘・中学生の葉月が一人で家を出るところを見かける。不法投棄が行われている場所まで後をつけたとき、薫と葉月は洗濯機に捨てられた被害者の犬の死骸を発見する。

薫は、葉月からの証言を聞く。その証言は、葉月がダウジングをすることで、被害者の犬の居場所を突き止めたという、俄かには信じられない内容であった。葉月の証言の対応に困った薫は、湯川に相談を持ちかける。それを聞いた湯川は、真偽を確かめるため、葉月との対面を薫に指示する。

極度の子ども嫌いであった湯川が、会話できるようになっているのが興味を引くが、湯川の科学に対する見方も、人間的なものになっている。

「葉月ちゃんが本当のことを話してくれたおかげで、報告書も書きやすくなりました。ところ一つだけ訊いていいですか」

「なんだ」

「どうしてダウジング試験装置を使わなかったんですか。先生のことだからきっと、振り子の力を信じている彼女の目を覚まさせようとすると思ったんですけど」

すると湯川は彼女の顔を見つめ、ため息をつきながらかぶりを振った。

「君はまだ科学というものがわかってないな」

薫はむっとした。「どうしてですか」

「神秘的なものを否定するのが科学の目的じゃない。彼女は振り子によって、自分自身の心と対話をしている。迷いを振りきり、決断する手段として使っているにすぎない。振り子を動かしているのは彼女自身の良心だ。自分の良心が何をめざすのかを示す道具があるなら、それは幸せなことだ。我々が口出しをすべきことじゃない」[4)]

ここでは、科学と宗教を対立させて考えるのはなく、むしろ、科学の領域の外部には宗教の入る余地を認める、カントに代表される近代の哲学者のような考え方が表明されている。

第五章「攪乱す　みだす」ストーリーは、次のようである。ある日、警視庁へ一通の手紙が届いた。「悪魔の手」を名乗るその手紙の差出人は、自分の意思で自在に人を葬ることができるという。

俄かに信じがたいその内容に、警察は悪戯とも本物の予告状とも決められずにいた。しかし、その予告状にはＴ大学Ｙ准教授の名が書かれていた。

すると草薙の元に湯川から電話がかかってくる。なんと、湯川の元にも似たような手紙が届いたという。犯人は、湯川に挑戦状を出したということであった。犯人が誰か、本当の目的は何か、警察が何もわからぬまま、「悪魔の手」を名乗る人物が動き出す。

その後、「悪魔の手」は奇妙な方法による犯行予告による殺人をはじめ、様々な手を使って、警察を翻弄した。警察は、打つ手のない状況に困り果てる。

しかし、湯川の推理と薫の執念が、犯人のトリックのわずかな綻びからその真実を暴いていく。指一本触れずに殺害する手段を探る謎解きとともに、自らの命を賭け犯人を暴く、湯川の奮闘振りが際立っている。

3. 人の心がわかる

「操縦す　あやつる」で、恩師幸正から警察に捜査協力していることを聞かれ、湯川は苦笑し目を伏せた。

「研究をサボって、何をしているんだと叱られそうですね」

「いや、学んだことを人助けに利用するのは、学者として当然のことだ。世の中には、その逆をする人間も多い。つまり、学んだことを人殺しに使う連中のことだ」

湯川は頷いてから幸正の顔を見つめた[5)]。

ここでは、学問とは何か、何のためにするのか、という問に対する著者東野の答が示されている。また、その恩師であっても、湯川は決して妥協しない。

「湯川先生」彼女は声をかけた。顔を上げた彼に訊いた。「これでいいんですね？」

「もちろんだ。何か問題でも？」

いいえ、と首を振り、薫は部屋を出た。外で草薙が待っていた。

「あいつは真の科学者だ。だから、科学を殺人に使う人間のことは許せないんだよ。たとえ恩人であっても」

薫は黙って頷いた[6)]。

科学という学問は、真理の追究だけでなく、人を幸福にできなくても、不幸にすることは決してあってはならないと東野は考えているのである。そして、シリーズの進行に伴って、変人ガリレオが大きく変貌を遂げるのが、次の瞬間であった。恩師の気持ちを慮り、何とか救いたいと表明するのである。この物語は、次のように締めくくられている。

「君は変わったな。昔は科学にしか興味がなかったはずなのに。一体いつの間に、人の心がわかるようになった」

湯川は微笑した。

「人の心も科学です。とてつもなく奥深い」

友永は教え子をじっと見つめ、頷いた。

「その通りだな」そして白髪頭を下げた。「ありがとう」[7)]

4. 科学技術と人間

『禁断の魔術』は、シリーズ初となる全篇書下ろしである。著者によると、前作の『虚像の道化師　ガリレオ７』で、シリーズの短編は終わりと考えていた。当初は、『虚像の道化師』もこれまでの短編同様に５編収録させようと考えたが、湯川や草薙の人生や生活を積極的に書こうという想いから、湧き上がったアイデアが収まらなくなったようである。

『禁断の魔術』をテキストに選んだのは、従来よりも湯川の人間性が色濃く描かれているからである。

第一章の「透視す　みとおす」には、湯川が透視能

力をもつホステスに、その力を披露されたら、どんな反応をするのかという着想から、湯川が挑む謎が殺人に関係しないものになっている。

草薙に連れられ、彼の行きつけの銀座のクラブ「ハーブ」に通った湯川は、そこでホステスのアイの接客を受ける。アイは湯川に出させた名刺を見ることなく、湯川の苗字を言い当てる透視の芸を披露する。一度は、コートの裏側の刺繍を見た、と推理した湯川であったが、自分の名前や職業まで言い当てられて驚愕する。

それから4か月後、アイこと根本美香が殺害される事件が発生した。荒川沿いの草むらで、死体となって発見された。美香の足の間に付着していた煙草の葉っぱを足掛かりに、草薙たちは顔見知りの犯行として捜査に当たる。継母との確執以外、美香には死者への同情抜きでも、誰からも慕われる女性であったため、彼女を殺す動機のある人物の特定に難航してしまう。

やがて草薙は、美香を殺した犯人を突き止め逮捕した。犯人の動機は、美香に例の透視によって、横領を見抜かれたことにあった。しかし、美香の透視のからくりが判らず、動機の解明に行き詰まった草薙は、湯川に相談する。そして草薙から経緯を聞いていた湯川は、透視の謎と美香の抱える問題に光を当てていく。

第二章の「曲球る　まがる」でも、湯川が殺人事件解決以外に、人助けのために科学の知識を生かしている。これは、戦力外通告を受けたプロ野球選手と、殺人事件に巻き込まれた妻の物語である。

プロ野球選手の柳沢忠正の妻・妙子が、スポーツクラブの駐車場で撲殺される事件が発生した。捜査の結果、アイドルグループの追っかけの資金繰りのために犯行に及んだ、スポーツクラブの元警備員が逮捕され事件は解決した。

妙子は、生前にデパートで置時計を購入しており、柳沢自身も心当たりがないことから、妙子が置時計を買った理由は謎のままとなった。

事件後、野球選手として限界を実感していた柳沢は、遺留品の置時計を返却しにきた草薙に話の流れで、湯川を紹介される。これをきっかけに、湯川から科学的な監修を受けることになった。

そうした中、偶然柳沢とファミレスでコーヒーを飲んだ湯川は、柳沢の車から錆が出ているのを発見した。その車が、事件当日に妙子が乗っていたと聞いた湯川は、草薙と内海とともに妙子の行動を調べ始める。そして、その置時計の背景にあった妙子の想いが明らかになる。物語最後の湯川と草薙の会話を、見てみよう。

「なあ湯川、実際のところはどうなんだ」草薙は訊いた。「柳沢投手はプロのピッチャーとして復活できるのか」

「それは僕のような素人にはわからない」湯川は、さらりといった。「ただ、断言できることはある」

「何だ」

「どうのように投げれば、ボールがどのように変化するかは科学で解明できる。だけど、どう投げるかは投手次第だ。そこに物理学の入り込む余地はない。人間の身体の動きが精神に大きく影響を受けることは、多くの実験によって明らかにされている」

「すべては本人次第ということか」[8)]

科学一辺倒であった湯川が、人間の精神にまで言及するようになっている。湯川の変化、成長が見て取れる発言である。

第三章の「念波る　おくる」では、湯川がこれまでの事件とは、異なるアプローチをする様子が描かれている。双子の間に、テレパシーは存在するかがテーマである。主婦の磯谷若菜が東京の自宅で襲われ、意識不明の重体となった。これを最初に知ったのは、双子の妹である御厨春菜である。遠く離れた長野の自宅で、姉からのテレパシーを受け取った。この双子の姉妹には、テレパシー能力があるという。

テレパシーなどは存在せず、若菜が襲撃されたことを春菜が知った方法は別にある、と捜査を続けるのが草薙と内海である。しかし湯川は、春菜のテレパシーの能力を信じ、本格的のその研究を始める。湯川が、テレパシーを信じた理由とは何か。双子の姉妹が相互に念波るテレパシーの謎に、湯川が迫る。

「あの話を聞いた時、すぐに彼女が嘘をついていると思った」

「なぜだ。科学的にありえないからか」

「科学でなく心理の問題だ。今も姉が苦しんでいることだけはわかる―考えてみろよ。そんな時に、呑気に物理学者の好奇心に付き合っていられるだろうか。病院に駆けつけ、四六時中そばにいたいと思うのがふつうじゃないか？　テレパシーの存在が証明されようが否定されようが、彼女にはどうでもいいことのはずだからな」[9)]

といい、科学的に解明するより、心の問題に昇華させている。「操縦す　あやつる」で、東野は湯川に「人の心も科学」といわせているが、さらに一歩進めて、科学でも説明しきれない心の領域を認めている。

第四章の「猛射つ　うつ」は、『禁断の魔術』の半分の頁をしめる中編である。東野は「自分のせいで殺人犯になりかねない人間がいたら、湯川はどうするのか」というテーマで、犯罪に手を染めようとする信頼する愛弟子に対する、湯川の意外な行動を描く。

『容疑者Xの献身』や『聖女の救済』にも匹敵するほど、中身の濃い作品である[10]。

といわれている、この第４章について、次に詳しく検討してみよう。

5. 禁断の科学技術—おわりにかえて—

ある年の５月、帝都大学の新入生古芝伸吾が、湯川の研究室を訪ねるところから物語が始まる。

実は以前、伸吾が所属していた「物理研究会」の入部希望者を増やすために、高校のＯＢである湯川に、ある装置の製作を手伝ってもらったのである。その後、しばらく疎遠になっていたが、湯川の存在は受験勉強のモチベーションであったことが、書かれている。

しかし、湯川のことを忘れたことはなかった。それどころか、彼に憧れる気持ちが勉強時の集中力を高めてくれたといえる。志望は帝都大学、それ以外には考えられなかった。ただし物理学科ではなく、機械工学科を目指した。そちらのほうが就職しやすいと考えたからだ。伸吾は湯川に憧れてはいたが、自分が学者タイプでないことはわかっていた[11]。

伸吾には、湯川以外にも尊敬する人物がもう一人いた。それは伸吾の亡き父親、恵介である。重機を扱うメーカーの技術者であった。恵介の口癖は、「科学を制する者は世界を制す」であったという。

「オリンピックが良い例だ、ただ身体を鍛えるだけでは勝てない。健康管理にトレーニング、テクニック、戦術、道具、スパイク、水着—スポーツ科学を極めた者にしか勝利は与えられない。根性論や精神論なんてナンセンスだ。いや、精神さえも突き詰めれば脳科学の話だ。逆にいえば、科学を味方につけた者は無敵だ。どんな夢さえも叶う」夕食時の晩酌のビールが進むと、恵介はいつもこんなことをいった[12]。

伸吾は、「また始まった」と思いながら、父のこういう話を聞くのは、嫌いではなかった。いつしか彼自身も、科学に興味を示すようになっていたのである。

伸吾は、湯川のいる帝都大学で科学をしっかりと学び、父親のような優秀な技術者になる、現時点での目標であった。帝都大学に入学して、青春を謳歌するはずであった伸吾の人生は、湯川と会った帰り道で一変する。仲の良かった姉の秋穂が殺された。その後、伸吾は大学を辞め、秋穂を殺した犯人を自力で突き止めることに成功した。姉の敵を討とうとするのである。

その復讐の道具が、かつて湯川と一緒に作った「レールガン」という装置であった。もちろん、当時は実験用に作ったものであるが、改造すれば殺傷能力の高い武器にもなり得るのである。

捜査を始めた草薙と薫の次の会話には、湯川の「科学技術」に対する考え方が明確に打ち出されている。

車から降りると身体が震えた。雛祭りを過ぎたというのに、まるで真冬の気温だ。

「ううー、寒い。どうして今年は、いつまでもこんない寒いんだ。暖冬が恋しいねえ」首をすくめて歩きだしながら草薙はいった。

「そんなことをいったら、湯川先生に叱られますよ」同行してきた内海薫が、草薙の友人の名前を出した。「あの方は地球温暖化を本気で心配しておられますから」

「ふん、温暖化の原因を作ったのは、奴ら科学者だってのに」

「それは認めておられますみたいです。だから科学者は反省すべきだと」

「へえ、珍しいな」

「どんなに素晴らしい科学技術を生み出しても、使う人間が愚かだと世界はだめになる。そのことを肝に銘じなきゃいけないと先日いっておられました」[13]

すなわち、素晴らしい科学技術というものも、それ自体は善でも悪でもない。その科学技術を使用する人間次第で、善にも悪になりうるというのである。

「君たちはフリーライター殺害事件を捜査しているんだったな。なぜ古芝君の会社に聞き込みに行ったのかは知らないが、彼が事件に関係している可能性は百パーセントないと断言できる。ただ、行方がわからないというのは気になる。居場所が判明したら知らせてくれないか」

「ああ、そうしよう。しかしおまえが百パーセントなんて表現を使うことは珍しいな。何ごとにも絶対はない、というのが信条だったんじゃないのか」

「自信たっぷりだな。たった二週間の付き合いなのに」

「ただの二週間じゃない。その間に一緒に研究し、一つのものを協力して作り上げた。どういう人間かはわかっている」

「なるほどね。おまえがそこまでいうなら、そうなんだろうな」[14)]

ここで、東野が湯川に語らせているのは、エンジニアとして重要な視点である。「ものづくりは人づくり」というのは、こういう状況から生まれたフレーズであるといえる。内海薫が、湯川に尋ねる。

「参考までに伺いますが、レールガンの発射物が人の頭に当たったらどうなりますか」

「さあね」湯川は気のない返事をした。「そんなことは考えたこともない。何度もいうようだが、レールガンは実験装置であって武器じゃない。もちろん君のいいたいことはわかっている。使う人間によって武器になる。だろ？　科学技術には、常にそういう側面がある。良いことばかりではない。使い方を間違えれば、禁断の魔術となる。そういうことも彼には教えたつもりだったが……」

「古芝君は、その言葉を忘れたんでしょうか」

湯川は首を振った。「そうでないことを祈るだけだ」[15)]

湯川の発言に、ガリレオ８のタイトル「禁断の魔術」が登場してくる。ここで、それ自体では善とも悪とも決めることのできない、科学技術の両義性が語られている。

姉の復讐をしようと、レールガンをセットした伸吾から、制御権を奪った湯川は、次のように語りかける。

「私がここへ来たのは、一言でいえば責任を取るためだ」湯川はいった。「事情はわかっている。君だって聖人君子じゃない。愛する人を見殺しにされた恨みを晴らしたいと思うこともあるだろう。だけど思い出してほしい。レールガンの研究に没頭した時のことを。二人でどんな話をした？　科学の素晴らしさを語り合っただろ。私は君にそんなことをさせたくて科学を教えたんじゃない」

伸吾は頷いた。返す言葉などなかった。

しかし、と湯川は続けた。

「無理に断念させようとは思わない。君がどうしても思いを遂げたいというなら力を貸そう。君にそのレールガンを作らせたのは私だ。だから私が決着をつける。撃ちたいと思うなら、そういってくれ。代議士の頭部が照準器に入った瞬間、私はレールガンを発射させる」[16)]

そして、この後で決断できないで師に対して、湯川が発したのが、本稿の冒頭の言葉である。さらに、湯川は伸吾の尊敬するもう一人の人物、彼の父親の仕事について話し始める。それは、伸吾が知らなかった父親の一面である。

「お父さんは地雷撤去の機械を開発し、カンボジアで利用しようとしていた」

「地雷」

驚いた。初めて聞く話だった。

「開発を提案した時の報告書の前書きには、こうある」湯川がいった。「地雷は核兵器と並んで、科学者が作った最低最悪の代物である。いかなることがあっても科学技術によって、人間の生命を脅かすことは許されない。私は科学を志す者として、過去の過ちを正したい。どうだ？　今、君がやろうとしていることは、果たして天国のお父さんを喜ばせるだろうか。」[17)]

この話を聞いたことで、伸吾は復讐を断念し、湯川も殺人を実行せずに済む。父が聞かせなかった科学技術の負の側面、今自分の行おうとしているのは、地雷と同じ科学技術の悪用であると気づいたのである。これが、東野圭吾の主張する「技術者倫理」であった。

文　献

1）東野圭吾：禁断の魔術　ガリレオ８，p. 323（文芸春秋，2012）
2）東野圭吾：ガリレオの苦悩，p. 46（文春文庫，2011）
3）ガリレオの苦悩，p. 77
4）ガリレオの苦悩，p. 267
5）ガリレオの苦悩，p. 134
6）ガリレオの苦悩，p. 156
7）ガリレオの苦悩，p. 165
8）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 118
9）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 165
10）洋泉社編集部編：増補改訂版　東野圭吾全小説ガイドブック，p. 59（洋泉社，2013）
11）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 179
12）同上。
13）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 180－181
14）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 211－212
15）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 309－310
16）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 320－321
17）禁断の魔術　ガリレオ８，p. 324